



たしかなものをもとめて

遠藤

9月8日、IOC総会での首相プレゼンテーション、「フクシマについてお案じの向きには、私から保証をいたします。状況はコントロールされています。東京には、いかなる悪影響にしる、これまで及ぼしたことはなく、今後とも及ぼすことはありません」を聞いて仰天した。

原発事故自体もコントロールできず、大量の放射能汚染水が流れつづけ、被災者が帰郷できない状況が続いている。しかしオリンピック誘致という国策のためなら、いかなる虚言も許される。さらにこの虚言を「すばらしい演説でした」と讃えるアナウンサー。これを聞いていて「日本は壊れている」という善元さんのことばを思い出した。

日本は壊れているのか。これに関連し、つい最近の世界史授業での生徒とのやりとりを紹介したい。市民革命、社会契約説の説明をした直後、生徒から投げかけてきた話題である。

生徒「先生さあ、テレビ見てるとさあ、東京にオリンピックが決まったってはいしゃいであるけどさあ、おかしくない？オリンピックの前にやることいっぱいあんじゃない？」

私「それってどういうこと？」

生徒「だってさあ、震災復興はできてないし、原発事故だっておさまってないし、そっちが先じゃない？」

私「そうだよなあ、汚染水はたれ流しだし」

生徒「そうそう、ほら、あの石で覆うやつ、早く作ってほしいよ」

私「チェルノブイリの石棺みたいなものね」

生徒「そうそう」

私「そういえば、きのうテレビ見ていたら、首相が原発について問題ないと演説してたけど、変だよな。テレビじゃ誰もそのことを批判しないし、万々歳だし」

生徒「きっとマスコミは政府を批判できないんだよ、なんか変だよ」

目次

たしかなものをもとめて	1
第19回交流会を終えて	
陝川の実り	2
陝川大会の感想	3
書評 『福島から問う 勲奇と命』	7

私「そうだよなあ。でもなんとかしなきゃなあ…。Aさんってすばらしい見方をしてるね。じゃあ、授業をもとにもどそうか」

Aさんばかりではなく、他の生徒も発言しだした。このとき安堵感をおぼえ、職員室にもどった。礼賛一色のメディアとはことなり、生徒は冷静にものを見ている。別の場面で別の生徒も「俺ってさあ、オリンピックが来るのってさあ、涙を流すほどうれいって思わないんだ。別に反対ってわけじゃないけど」と語っていた。

9月6日、韓国政府が東北関東8県からの水産物輸入を禁止したが、これについて週刊誌等は「韓国は妨害工作している」と声を荒げている。これに先立つ8月26日、国連の潘基文事務総長がソウルで「正しい歴史(認識)が良好な国家関係を維持する」「日本の政治指導者は深い省察をもって国際的視野に立った未来像を描く必要がある」と演説したが、官房長官は「(発言の)真意を確認し、引き続き日本の立場を国連などで説明していきたい」と不快感を示したという。この「不快感」こそ「不快」な脅迫だ。官民そろってのこういう動きはヘイトスピーチ同様危険きわまらない。

このようななかでも壊れていないものを大切にしつつ、壊れたものは根本的に直すための芽を育てていかなければならない。

20回交流会までのこり10カ月。交流会開催地、埼玉県嵐山町は東京の西北、福島原発から東京までの距離と同心円上にある。地図を少し引いてみると、福島、東京、嵐山はそう遠い距離ではない。韓国での原発事故関連報道を一蹴することはできない。2011年5月27日の朝日新聞投書で福島の高校教師中村晋さんが紹介された「いっそのこと原発なんて全部爆発しちゃえばいいんだ!」という福島の定時制高校生の声をきちんとうけとめつつ、東アジアの平和、環境、文化、歴史等を日韓ともに生徒とともに考えていきたい。

第19回交流会 陝川（ハプチョン）大会を終えて

陝川の実り

第19回交流会日本側実行委員長 藤田

8月2日から5日の4日間(+アフター1日)第19回交流会が行われた。「原爆から原発まで、苦痛の歴史に向き合う教育」をテーマに盛りだくさんなプログラムの中、たくさんの課題をどのようにまとめるか不安があり、釜山からコバルト鉱山までのバスの床に座り込んで韓国側の実行委員と話し合った。しかし、全てのプログラムを終え、予想以上に収穫の多い交流会だったと感じている。

今回の交流会に対して最も期待していた事柄は、「韓国のヒロシマ」陝川に行くことであった。フクシマ以降、私たちはもう一度「反核」を考え直している。複雑に絡み合う原発にかかわる課題から、ヒロシマをシンボルとしてきた平和教育の在り方までが問われている。そのような中で、私たちが韓国で戦後を生きてきた被爆者と出会うことに、どのような意味があるのか。

韓国原爆2世患友会会長のハンジョンスンさんやハルモニたちとの出会い、カンジェスクさんとの再会、福島の自然を写した写真集に李相和の詩「奪われた野にも春は来るか」を題名につけた写真家チョンジュハさんの心にせまる講演。こんな運動があったのかと知らされた密陽送電塔

対策委員会のコジョンギルさんの話。福島の中学校教員堀越伸さんの言葉を熱心に聞く韓国の人たちの姿。安藤さんが「福島は本当にいいところです。」と語りながら流した涙。

FWでは、陝川の他に、近現代史の傷跡が残る二つの場所に行った、コバルト鉱山の坑道の前に並ばされて、撃たれ、落ちた遺体は雨が降るたびに別の坑道から流れ出るという場所。そして、やはり朝鮮戦争のときに民間人が多数殺された居昌。国家による犯罪の前に多くの幼い命が犠牲になる。キムミンギョンさんの報告は、傷ついた若い魂に寄り添う教員の姿から、私たちの仕事かどのようなものであるのかを考えさせてもらった。

チョンヨンジュンさん、善元幸夫さんによる「やくそくのどんぐり」をめぐる授業報告は私たちの交流会が、授業を中心としていることに深い意味があることを思い起こさせるものだった。とても乗り越えられないような課題の中で、しかし、平和と人権を中心に子どもたちに向かっていく、そのような課題を日韓で共有していく。それが、私たちの交流会である。

「原爆から原発まで」という課題については、今回十分に深められたとは言えない。課題は来年、埼玉嵐山に引き継がれる。

陝川大会の感想

堀越

朝からありがとうございました。正直を申し上げますと今回の旅行、というよりは日本脱出については不安というか、すっきりしない気持ちがずっと続いていました。それは自分でもどうしてなのかわかりません。そういう気持ちはあったのですが、成田で雁部先生にお会いし、釜山に来て日本の方々にお会いして、そして韓国の会員の皆様にお会いし、ほっとしました。私もサークルなどで会合を企画するのですが、非常に主催する方々の苦労がわかります。本当にすみずみまで配慮いただきありがとうございます。それから日本の会員の皆様にもお世話になりました。私はレポートを出したものの、ただ来ているだけなので心苦しく思っております。ありがとうございます。

先ほど安藤先生から戊辰戦争のお話がありました。そのころの会津には小さな子どもたちの学校である日新館というところがありました。そこでの教えの中に、「仕の掟」……“ならぬことはならぬものです”というものがありません。その考えは今も会津地方に受け継がれております。今のことばに直せば、「だめなものはだめ」ということです。私は“ならぬものはならぬもの”とは思いますが、大きな力の前に出ると尻込みをしてしまうことが多いです。今回多くのフィールドワークや報告を聞きますと、ダメなことに対して本当に体を張って活動しておられる民間団体の方々や、信念を持って授業をされていらっしゃる先生方、本当に頭が下がります。また、若い先生方の生徒に対する熱い思いが伝わってきました。お年寄りから若い方々まで情熱を持って信念を通しての姿にとっても感動いたしました。私は弱いところがありますが、“ならぬことはならぬものです”ということをもとに、これからは身近なところから自分のできる範囲で実践していきたいと考えております。さきほど話題になりました幕末から明治初期を生き抜いた会津の人々を中心にしたドラマ「八重の桜」がNHKで放送されています。主人公の「八重さん」が“ハンサムウーマン”ということで話題になっております。心はいつでもハンサムでありたいということです。私もいろいろところで、温かい心を伝えていけるような活動をし、子どもたちにもそのように接していきたいと思っております。おかげさまで今はとても心が軽くなり、自信が湧いてきました。これも皆様の温かい心と情熱に触れたおかげだと思っております。いいお土産ができました。

Pa

本当にありがとうございました。

佐藤

今年の交流会は、「韓国のヒロシマ」といわれる陝川（会場は伽耶山近くの伽耶ホテル）で行われるとのことでしたので、最初、原爆や原発に関したことが主だと思っていました。でも、韓国側から送られてきた資料は幅広いもので、「やくそくのどんぐり」に関係した授業報告、陝川平和の家の会長さんの「原爆被害者の声」、密陽の送電塔反対運動から、疎外された子どもたちの現状についての相談報告、慶山コバルト鉱山や居昌の民間人虐殺事件まで多彩でした。



授業報告の様子

短い日程の交流会に「ずいぶん盛り込む〜！」とその時は思いましたが、今、振り返ってみると韓国側が用意されたものはとても充実した内容だったと思います。

今回のフィールドワークでは、二つの民間人虐殺事件の場に行きました。交流会初日には、慶山新聞社での慶山コバルト鉱山民間人虐殺事件（1950年7～9月に国民保導連盟員や大邱刑務所収監者など3,500人を慶山コバルト鉱山廃坑道などで虐殺した事件）についての講演を聞いてからコバルト鉱山跡に、その翌日には、居昌民間人虐殺事件（1951年2月9日～11日に韓国軍がパルチザンを殲滅するためとして、大人、子ども合わせて719人を虐殺した事件）を追悼する居昌事件追慕公園に行きました。

韓国では良民虐殺という用語が使われたりしますが、虐殺された人々が罪なくして、つまり左翼思想の持ち主でないにもかかわらず殺されたということを意味するようです。そのため特に慶山コバルト鉱山民間人虐殺事件の場合、保導連盟員や左翼収監者たちが含まれることで虐殺された家族、親族を持つ方々は、虐殺を訴える声を上げにくい時期もあったとのことです。

朝鮮戦争の時代に起こったこれらの痛ましい事件は、韓国内でも知らない方が多いようですが、負の歴史をフィールドワークの中に盛り込まれたのは、19年続いている交流会の積み重ねがあったからだと思います。

2日目のフィールドワークでは、今回の交流会のメインである陝川に行き、陝川平和の家でハルモニのキムイルチョさんと韓国原爆2世患友会会長のハンジョンスンさんのお話をうかがいました。キムイルチョさんは京都生まれで小さい頃広島に移られ、その後原爆にあい、ご主人の故郷である陝川に来られたと淡々と話してくださいました。ただ、話の中で韓国に帰らなければ日本人に殺されるとも話されていました。また、ハンジョンスンさんは体の具合が悪く、手術を控えておられるのにとってもそんな風には見えないような穏やかな感じで私たちに話してくださいました。そして、私にとって最も印象的だったのは若い事務局長さんがいつもにこにこされていて、ダウン症のいとこの方とお話されている時も表情がとても明るかったことです。陝川の現実は厳しいものと思われませんが、それを乗り越えておられる前向きな方々にお会いできてよかったと思いました。

ただ、今回、「陝川交流会」としている割には2時間ほどの陝川滞在でしたので、あまりにも短く残念でした。（アフター参加者は、2013 陝川非核平和大会の前夜祭のために5日夜に再び陝川を訪れましたが…。）

授業報告では、善元先生、遠藤先生、堀越先生、韓国側のキムミンギョン先生の報告それぞれが心に残るものでした。そのほか、密陽送電塔反対対策委員会のコジュンギル先生のお話は、韓

電が計画している76万5千ボルト（高さ94m）の送電塔建設を密陽のハルモニたちが阻止するための闘いについてでした。日本で東京電力が福島、新潟に原発を建てているのと同じく、韓国も大都市から遠く離れた蔚山市に新古里原発を作っているのですが、送電塔、送電線による電磁波の影響についてのことにまで考えが及ばなかった私には、大変印象的なものでした。

交流会最終日の写真家チョンジュハ先生の講演を、私はとても楽しみにしていました。チェヘジン先生が日韓合同授業研究会のメールで知らせてくださったお陰で、東京で開かれた写真展に行ったり、NHKの番組を見たりして、すっかりチョンジュハ先生のファンになっていましたが、期待を裏切らない素晴らしい講演でした。

最後になりますが、今回の交流会では韓国側事務局の方々にはとてもお世話になりました。ありがとうございました。

交流会から帰ってからは、いただいた密陽のハルモニたちの闘争について書かれた冊子を読ませていただきました。そして、送電塔のことによく知らなかったのでインターネットで調べてみると、日本では1999(平成11)年に100万ボルトの送電鉄塔（高さ110m）が建設されていたということを知りました。ただ、電磁波の影響を懸念する沿線地域が反対しているため、現在は50万ボルトで運転とのこと。しかし、韓国で激しい反対運動が繰り広げられている送電塔より大きなものが既に日本に建っていることを知って、愕然としました。

安藤

いつもいつも、夏の交流会の直前は事前準備のために、慌ただしい日々がすぎ、いろいろ懸案事項がでるが、交流会が始まると、怒濤のようなスケジュールの中で、いつの間にか、懸案事項であったことが、うまく解決していることが多い。それはきっと参加者全員の大会にかける想いがいい意味で結集している証しなのではないかと私はしみじみ思う。

今回の交流会も日本側は原爆と原発被害をテーマとして考え、韓国側は国家による加害という点を大きなテーマとしており、当初はうまくまとまるのだろうかとの危惧があった。

しかし授業実践報告やフィールドワークを通じて日本側のテーマと韓国側のテーマの共通点を見いだすことができた。それは「忘れないこと、そして掘り起こす大切さ。」である。



初日に訪れた、慶山コバルト鉱山における虐殺事件、これはチェジュ4・3事件との関係も深い、未だに国家による謝罪・犠牲者の名誉回復が行われていないという。4・3事件でさえ、チェジュに大きな資料館が建てられ、居昌事件にも大きな追慕公園が建てられているのにこの違いは何であろうか。ただ追慕公園のパクチョンヒ時代に壊された石碑や、チェジュでの被害者の墓地の移転のように、政権によって歴史の評価が変わってしまう恐ろしさは共通する。

原爆被害については、韓国人をはじめとする在外被爆者の存在はほとんど忘れられている現状を、陝川で確認した。8月6日の安倍首相の「唯一の被爆国日本。」という声明に覆い隠されてしまう前に、同じ日、韓国陝川でももう1つの被爆者の集会が行われていることを忘れてはならない。「忘れないこと、そして掘り起こす大切さ。」これをしっかり見ていかなければと想う。これは善元先生の授業実践報告の根底にもリンクしてくるだろう。

韓国のチョンヨンジュ先生の報告は子ども達が、自分たちが使う電気をおこす原子力とは？という視点の授業展開であったが、考えてみると実は私たち日本人の大人でさえ、原発事故の前の意識はこの子ども達の意識とそんなに違わなかったのではないだろうか。私たちも原子力＝クリーンと某電力会社の宣伝を信じ込まされ、原発は都会から遠い所に、まるで覆い隠されるように立地されてきた。事故によって、原発の恐ろしさを一時は全国民が痛感したものの、日本では政権が変わった後に、あのおぞましい事故（現在も進行中であるのに）がなかったかのように、そして現在も避難生活を強いられている人達や厳しい状況下の人々を忘れたかのように、外国に原発を売ろうとさえしている。そして都合の悪いことは忘れてしまおう、なかったことにしまおう。何かこのような作用が働き出していると思うのは杞憂だろうか。だからこそもう一度福島の現実を知ろうと想う。震災・原発事故後の福島朝鮮学校の状況を知り、堀越先生の報告をしっかりうけとめる必要を感じる。その意味で今回堀越先生に、お忙しい中を参加してご発表いただいたことが非常に喜びだった。

韓国でも原発に対して疑問の声があがっている。以前交流会が開かれた密陽の原発からの高圧送電線の送電鉄塔反対運動の報告は、最初は電磁波にたいする周辺住民の危惧から起こったものが、今は原発そのものへの反対運動に発展していることに驚いた。しかしよく考えれば当然のことかも知れない。覆い隠された中で生きてると私たちは狭い視野でしか物事を考えなくなる。しかしそこに一粒の石が投げ込まれ、波紋が生じると、思考は多面的に及ぶ。キムミンギョン先生の報告も、単にカウンセリングの臨床報告だけでなく、そこから自分の居る町、働く町について考察を広げていくことが、価値のあることだと想う。

思いをはせること。交流会最終日に講演をいただいたチョンジュハ先生は、NHKの番組を見て、私は感動し実は今回が一番楽しみにしていた。「奪われた野にも春は来るか」このテーマで震災後の福島に通い、人々に寄り添うように写真を撮り続けているチョン先生。日帝時代の朝鮮の人々の苦しみと現在の福島の人々の苦しみに、民族・時代を超えて同じ視点で思いをはせるチョン先生の深い人間性に感動したが、今回お会いしてやっぱり想ったとおりの人だったという喜びを感じた。

国家は、都合の悪い真実を覆い隠し、人々の眼からそらそうとする。都合のわるいものは多くの人の眼に触れぬ地方へ、原発・虐殺などすべてにおいて共通しているように想う。だからこの覆い隠そうとされる真実・歴史を直視すること。今回の交流会で最後に思いついた事があった。真実・歴史を直視する努力をしている人々はその地域に住み、その地域を愛している人々なのだということに。慶山、居昌、密陽、そして福島。自分たちの住むところを守るために、時には国家と対立すること。「郷土を愛することは、時に偏狭なナショナリズムを超える。」以前読んで本に書いてあったこの言葉を思い出す。堀越先生が発表の最後に「子ども達には福島に誇りを持って欲しい。」と言ったことが、今回の交流会で一番心に残った言葉になった。

中村晋 大森直樹著 『福島から問う 教育と命』

(岩波ブックレット 500円)

善元

中村晋と大森直樹は「3・11 東日本大震災」を通して不思議な縁でつながっている。2人の出会いは、東日本大震災。東京の大学教師・大森は政府や教育行政による被災地の子どもたちの実情調査が極度に少ない中で、子どもたちの安否、避難先などの全体資料をまとめていた。福島の高校の教師・中村晋は短歌を通して、震災やそこでの子どもたちの内面に迫っていった。2人を繋ぐもの、それは「教育と命」であり、2人は会うべくして出会ったともいえる。

2011年3月11日。日本の風景は変わった。いまだ死者、行方不明を合わせて18000人。避難・転居者は28万人を越えている。震災後の政府の対応、それに伴う日本の風景の変化である。事故当時、日本政府は本当のことを言わなかった。私たちにはどの情報が正しいのかわからず振り回され、大人も子供も不安になった。中村晋のクラスの子どもたちもそうである。東京中心の安全を唱える価値観に対し、先生の勤務している定時制の子どもたちは「いっそのこと原発なんか全部爆発してしまえばいいのだ」と怒りを込めて言う。また自分の怒りや悲しみを心の中に閉じ込めている子どもたちとも出会った。中村先生自身、自らも被曝し家族の中でも解決の出口がなかなか見えず亀裂が生じることもあった。そうした中で中村は子どもたちと寄り添い、子どもたちの考えを丁寧に引きだしている。

大森直樹は行政の情報だけではなく、震災を新聞などで発信している記事にも丹念に目を通して中村晋の記事を見た。新聞の投稿記事を見て気になり調べていくと中村晋の教育実践に出会ったのである。それは公式の情報ではなく震災時の子どもたちの置かれている状況である。ここには子ども一人一人の悩みや不安、怒りを丁寧に子どもと付き合っているから見えた世界があった。また大森直樹の仕事は、震災に直面して大きな見解を抽象的に論じるのではない。子どもたちの実態を残す。そして、そこから見えてきた世界の実情分析を丁寧に行う。そのような数少ない仕事をしている。そこで新たになった話をひとつ紹介したい。ここでの学校実情で朝鮮学校の新潟への疎開を丁寧に分析している。日本政府は震災による混乱を避けようとしたのか震災の情報を正しく、少なくとも被災地の人に対して、伝えていなかった。その結果、避難先を求めている住民を放射線物質の向かう方向へ導いていたのだ。これは見方によれば国家の犯罪である。そのような状況で避難が望ましい小・中学校に対しても十分な措置がなされていなかった。しかし教育学者・大森はその事実を、朝鮮学校の疎開を丁寧に伝えている。日本の公立学校ができなかったことを、子どもの命を最優先に考えた朝鮮学校はそれをやりとげたのである。

いまだ朝鮮学校に対して偏見と差別がある中で、このことの意味は大きい。震災以降日本の保守・排外主義には目に余るものがある。新大久保では「韓国人帰れ」のデモが行われ、今年の9



月には地元にある東京韓国学校に対しても排外的なキャンペーンを流している。日本のこれからを考えると、事実を明らかにし、そこからどのような教育実践が行われているのか探し出すことが大切である。中村晋の仕事、それを見出した大森直樹の仕事、このような先生がいることが、今後の私たちに大きな励ましを与えてくれる。今年おさえておきたい貴重な1冊である。



ウッポ沼近くの店のパピンス オニバスの葉が敷いてある

短信

- ウッポ沼では、イインク先生たちがトキの繁殖を行っていました。立派な建物から沼を観察しました。ウッポ沼をかつて訪れたとき、イインク先生が沼にじゃぶじゃぶ入って行って解説してくれたことを思い出します。
- ウッポ沼近くのおしゃれな喫茶店では、料理研究家の店長が地元の果物を使ったかき氷パピンスを作ってくれました。
- 安倍首相が「東京は安全です。」と言ったあの笑顔には、言葉を失いました。
- 横浜では、関東大震災の朝鮮人虐殺について副読本から削除するとのこと。大阪では、国歌斉唱のとき、歌っているかどうか教員の唇をチェックするそうです。
- 次回の日韓合同授業研究会の集まり（モイム）は、10月14日（月）13:00 多文化共生プラザ（新宿 ハイジア11階）です。（F）

ウリ88号 2013年9月27日

日韓合同授業研究会

〒102-0074 東京都千代田区九段南3-9-11

マールコート麹町303

吉峯総合法律事務所内

事務局連絡先（事務局長 藤田）

<http://nikkangodo.narishi.org:8080/nikkangodo>

angodo

会費納入先

郵便振替 00170-1-428530 一瀬